

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 NPO 大泉国際教育技術普及センター

1 事業の趣旨・目的

日本語教室ですでに講師としての経験を十分に積んでいる者から、日本語初習者、中級者に対する効果的な教授法をテキストや実習を通して伝達するとともに、両者のこれまでの経験を踏まえ、より効果的な独自の教授法を開発する。

貴庁から受託している日本語教室において、すでに講師補助として参加している日系ブラジル人青少年および地域でボランティアとして活動している補助講師対象。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
5月28日 14:00～	日伯学園	拝野、高野、 戸澤、中西、 阿部、堀江、 戸澤、井上	・講座開催の内容説明 ・講座の運営説明 ・講義担当の割り当て	・初めての試みのため、 どのように展開してい くか ・質疑応答
7月2日 14:00～	日伯学園	拝野、高野、 戸澤、中西、 阿部、堀江、 戸澤、井上	・5回講義を終えてどうだ ったか ・今後の展開に対する課 題	・受講者の反応につい て ・質疑応答
11月5日 14:00～	日伯学園	拝野、高野、 戸澤、中西、 阿部、堀江、 戸澤、井上	・22回講義終えての報告 ・質疑応答	・受講者からの質疑応 答報告
12月10 日 14:00～	日伯学園	拝野、高野、 戸澤、中西、 阿部、堀江、 戸澤、井上	・講座の終了報告、反省 点について ・今後の受講者の活用法	・どのような場面で受講 者を活用していける のか ・質疑応答

【写真】(会議風景の写真を1～2枚参考に添付して下さい。)



3 養成講座の内容について

- (1) 養成講座名 次世代教授者への教授法の伝達および新教授法の開発
- (2) 養成講座の目標 ポルトガル語話者を対象とした日本語教育法（教授法）の伝達および、効果的教授法の開発
- (3) 受講者の総数 14 人
- (4) 開催時間数(回数) 1 時間 (25 回)
- (5) 参加対象者の要件 貴庁から受託している日本語教室において、すでに講師補助として参加している日系ブラジル人青少年および地域でボランティアとして活動している補助講師対象
- (6) 受講者の募集方法
地域のブラジル人商店にポスターを掲示および配布でよびかけるほか、知人、友人など人的ネットワークを駆使する。
(※どこでどのような媒体を使って募集したかを記載。なお、募集のチラシ等があれば添付すること。)
- (7) 研修会場 日伯学園 邑楽町校舎
- (8) 使用した教材・リソース 外語大 ぱっとみ辞典 (プロジェクト トウカーノ)
プリント (独自教材)

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
5月28日 15:45～16:45	ポ語、日本語の使い 分け活用法	上智大学ブラジル、ポルト ガルセンター拝野寿美子 (有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
6月4日 15:45～16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
6月11日 15:45～16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
6月18日 15:45～16:45	プリント(独自教材) による物の数え方の 指導	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
6月25日 15:45～16:45	プリント(独自教材) による物の数え方の 指導	上智大学ブラジル、ポルト ガルセンター拝野寿美子 (有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
7月2日 15:45～16:45	プリント(独自教材) による物の数え方の 指導	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
7月9日 15:45～16:45	プリント(独自教材) による物の数え方の 指導	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名

7月16日 15:45~16:45	日本語を教える中で のポルトガル語の役 割について	上智大学ブラジル、ポルト ガルセンター拝野寿美子 (有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
7月23日 15:45~16:45	みんなの日本語を活 用した簡単な会話の 教え方	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
7月30日 15:45~16:45	みんなの日本語を活 用した簡単な会話の 教え方	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
8月6日 15:45~16:45	みんなの日本語を活 用した簡単な会話の 教え方	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	13名
8月20日 15:45~16:45	みんなの日本語を活 用した簡単な会話の 教え方	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
8月27日 15:45~16:45	体の名称から覚える 日本語	日伯学園園長 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
9月3日 15:45~16:45	体の名称から覚える 日本語	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	13名
9月10日 15:45~16:45	体の名称から覚える 日本語	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名

9月17日 15:45~16:45	日本語を教える時に、ポ語をどのようにして導入するか	上智大学ブラジル、ポルトガルセンター拝野寿美子 (有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
9月24日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
10月1日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
10月8日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
10月15日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
10月22日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法	上智大学ブラジル、ポルトガルセンター拝野寿美子 (有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
10月29日 15:45~16:45	江副式教授法による 助詞の使い方	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	13名
11月5日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法(2年生漢字)	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名

11月12日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法(2年生漢字)	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名
11月19日 15:45~16:45	ぱっとみ辞典の活用 法(2年生漢字)	(有)大泉日伯センター 戸澤 江梨香 日伯学園教師 阿部 勇次郎	14名

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

講座の有効性を確認するため、受講生には講座の全日程が修了した際に講座に対するアンケートを実施した。主な意見は下記の通り。

「受講前はどのような講義を受けるのか解らなかったけれど、講義を受けて自分が今後どのように後輩達に教えればいいのかを学ぶことができた。」

「自分には解るけれど、人に教えるのは大変だったので、これからは覚えたことを生徒達のために使いたい。」

「教え方を覚えると、早く子供達と会いたくなる。」

「教えてもらうたびに、勉強しないといけないことが多くなって大変だと思った。」

「来年も教えてみたい。」

以上のように、受講生は経験を積んでいるとはいえ、これまでは自分が教えてもらった方法や、周囲の講師のやり方を模倣するしかなかったのが現実であるが、実際に専門家より日本語の教え方を学んでいくなかで、自信をつけた者も多かった。また、講師自身の不断の努力が不可欠であることを、実感したことは大きな成果であろう。なお、今回の受講生の中には、既にブラジルに帰国した者もいるが、彼女がこの講習の成果を早速ブラジルで活用し、年少者に日本語を教えているとのことである。

② 実施主体からの研修内容結果評価

前項でも紹介したが、この講座の最大の効果は、受講者が教えることに自信が出てきた点である。高校の国語の教員や、ブラジル人学校で長年日本語教育に携わっている大人たちから、「生徒」としてではなく「講師のたまご」として受ける授業は、それまでの日本語の授業とは全く異なる内容であり、その厳しさも当然増していた。その分、教える側であることへの自覚がより一層高まったといえる。

さらに、ポルトガル語を母語として使いこなせる自分達のオリジナリティを活かしながら小テストやカリキュラム作成するなど、実用にはまだ課題が残るものの、今後の日本語教室の教材開発のヒントになるものを残すことができた。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

経済危機により政府による帰国支援事業も行われ、約 2 万人がこの制度を活用して帰国したようである。つまり、現在日本に残っているブラジル人をはじめとする日系人は、日本定住を選び取った人々ともいえるのではない。特に日本語学習の受容性はこの経済危機で在日外国人にも大いに浸透している。ただ、日本語学習の裾野は今後も広がっていくだろう。今現在日本語を使いこなせない子どもたちには、母語で教えてくれ、なおかつ自分の少し先を歩いてくれているような身近な「先輩」が、わかりやすく日本語を教えてくれる状況を作り出せることが理想的である。日本語学習者のみならず、教える側の「先輩」の日本語学習動機も増すという相乗効果を期待できるからである。今回の講座をそのための一歩としたい。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

日本語教育の専門家集団である、日本語学校(具体的には新宿日本語学校)と連携し、今回の受講生たちの日本語教育の専門性を高めていきたい。それによって、今回実現した教材開発の実用性も高められればと思っている。

また、行政担当者とも 2009 年より連携がより充実したものにできたので、このような取り組みを広げていきたい。

さらに、当 NPO で受託している IOM の「虹の架け橋教室」を担当しているスタッフとの連携も深めて、効果的な学習について情報を交換していきたい。

② 研修後の人材活用

今回の受講者は「子供達が子供に教える」ことを前提にしているが、「子供達から大人に教える」場の提供も考えてる。今年度申請した文化庁の事業(日本語能力試験・準備講座及び直前強化講座)は、きめこまやかなグループ分けをするため、ほぼマンツーマンの指導体制をとらなければならない。講師の責任もそれだけ重くなるし、「子どもが一生懸命教えてくれている」と思えば、大人の学習者も自然と意欲がわくのではないだろうか。もちろん、大人の講師のフォローは必ずつけていく。

また、前述のように、講師たちのより一層のレベルアップを図るため、2010年度は新宿日本語学校主体で文化庁より日本語教育のプロに学ぶ! ボランティア講師のスキルアップ講習(修了書発行)を申請し、採択通知を待っている。

(12) 今後の課題

今回の課題は、受講者の中から相当数の帰国者が出たために、最後まで受講しきれなかった者が複数出てしまったことである。しかしながら、帰国後に日本語を教え始めた受講者が出たことは大きな希望であり、喜びである。日本の経済状況が上向けば、また「ブラジルから日本へ」という流れがより大きなものになるであろう。現在日本に留まっている在日外国人で日本に滞在している期間が長い者でも、皆が十分な日本語力を有しているわけではない。つまり、日本語教育の需要が減少する要素が今のところ見当たらないのである。これらの需要を満たすためにも、現在の日本語教育を支える

者の実力をアップさせ、さらに教える側の人口を増やしていくこと、また母語(当 NPO の場合はポルトガル語やスペイン語)を活用しながら日本語教育ができる人材を育成していくという最大の課題に今後も取り組んでいきたい。